じゃりみち

••••被 災 地 支 援 情 報••••

第 122 号　　発行日 2022.08.01

被災地 NGO 協働センター
〒 652 - 0801　神戸市兵庫区中道通 2 - 1 - 10
TEL:078-574-0701　　FAX:078-574-0702
HP:http://ngo-kyodo.org/
Facebook:https://www.facebook.com/KOBE1.17NGO
E-mail:info@ngo-kyodo.org
口座番号 :01180-6-68556(郵便振替)

2022 年度基本方針
災害時の「いのちと暮らし」を守るために

近年、災害は頻発化･激甚化が進んでいます。2021 年には、佐賀県で大雨による被害が出ましたが、2019 年にも被災した地域が再び災害による被害を受けました。多くの方々が、まさか 2 年でもう一度来るとは思わなかったとおっしゃっておりました。さらに、2022 年 3 月には福島県で地震による被害が発生しました。福島県では 2021 年にも同規模の地震が発生しており、2 年続けて大きな被害に遭った方も少なくありません。

このように、災害は待ったなしでやってくる時代になってきました。また、依然として猛威を奮っている新型コロナウイルスによる感染症によって、外部からの支援が限定されている状況も続いています。

このような状況の中、二度の被災を受けた方々は、非常に生活再建が厳しい状況に置かれています。しかし、そのような状況に対して支援制度を拡充することは難しいのが現状です。佐賀県武雄市では、多くの方々が 2 年前のリフォームのローンも残った状態で、新たなリフォームを進めなければならない状況でした。二度の被災を受けて店舗の再開を断念したという飲食店も少なくありません。現状のままの制度では、被災者の「暮らし」を支えるためには不十分であるのではないかと感じます。

2 年前の球磨川の被災地でも、これまでダムに頼らない流域治水を進めてきたにも関わらず、今回の水害により再びダム建設を進めようとしています。住民は翻弄され続け、その土地に住み続ける住民の合意形成が前述同様に不十分に感じます。

さらに、行政の職員数もかつてと比べて格段に減ってきています。1994 年にピークの 328 万人であった職員数は、2016 年に最少の 280 万人になります。2016 年以降は横ばい状態が続いていますが、かつてと比べ、行政のマンパワーがかなり減っているといえるでしょう。被災した自治体はただでさえ職員が少ない中、災害対応業務に忙殺され、被災者の声に耳を傾ける余裕が少なくなっているのかもしれません。

二度の被災を受けた佐賀県武雄市では、もう一度水害が来るのではないかという不安も拡大しています。しかし、安全な場所に引っ越すためにも資金が必要です。今いる家を水害に強くするために嵩上げをするにも、大変なお金が必要になっています。このままでは、被災された方々の「いのちと暮らし」を守るということが難しい状況が続いています。

もう一度、「いのちと暮らし」を守るために、何が必要なのかを考えていく必要があるのではないでしょうか。被災した方々一人ひとりの暮らしに向き合い、そして、次の災害でいのちが失われることのないようにするためにはどうすれば良いのでしょうか？

まずは、被災された方々の声に耳を傾けることが必要です。災害が頻発化していると共に、コロナ禍によって疲弊した状況が続いていることも影響し、多くの被災地が忘れられ、関心が薄まっています。被災者のそばに行き、声を聞き、その声を発信することが求められています。

さらに、その声をもとにアドボカシーをすることが重要です。現状の制度や支援体制のままでは、被災者の「いのちと暮らし」は守られません。被災者の方々がどのような状況に置かれているのか、生の声を聞き、その代弁者としてさまざまな機関に発信することが重要です。

そのためには、多くのボランティアが被災者のそばに駆けつけることが必要です。コロナ禍によって、活動の制限はありますが、何より大切なことは被災者一人ひとりに向き合うボランティアが、被災者のそばに駆けつけ、出会い、励ますということです。

2021 年の佐賀県の大雨災害では、佐賀県の災害 NPO ネットワークが外部団体の受け入れを柔軟に行いました。外部のボランティアが来なければ佐賀は復興しないという想いから、そのような受け入れをおこなったそうです。

災害の頻発化・激甚化と共に、コロナ禍という災害を乗り越え被災者の「いのちと暮らし」を守るためには､ボランティアの力が必要不可欠なのです。そのためのボランティアのあり方を追求し続けていきたいと思います。（頼政良太）

ご寄付のお願い

当センターでは、阪神・淡路大震災以来、被災地支援活動を継続して参りましたが、コロナ禍の影響もあり財政的に団体継続がこのままでは難しい状況となっております。大変恐縮ですが、どうか当団体の被災地支援活動継続のため、多くの方からご寄付をいただけますと幸いです。特に、安定した活動のためのマンスリーサポーターを募集しています。HP よりご寄付をいただくことが可能です。どうぞよろしくお願いします。

http://ngo-kyodo.org/donationandmembership/

POSKO と補完性の原理の組み合わせで被災者は救われる！！

「POSKO って何？」と首を傾げる方がほとんどでしょうか？POSKO というのは、インドネシアで災害後に自然に立ち上がる支援拠点であり、避難所ともなる場合もあります。特徴は二つあり、一つは被災地の被災者自身とその近隣に居る支援者が、風が吹けば飛ぶような簡易テントなどで立ち上げ、救援物資を受け入れ、被災者に提供するもの。二つ目は、警察や病院、大きなモスクなどが立ち上げるもの。従ってインドネシアでは、災害直後は被災地の至る所に POSKO という看板があがるのです。ということは、被災者は何か困ったことがあれば、何処に相談に行けばいいのか？とうろたえることはないということです。至るところに POSKO があるのです。つまり平時の社会を構成する共同体が災害直後に被災者支援に関与します。

さて､2020 年 7 月に発生した豪雨水害を思い出して下さい。新型コロナウイルス感染症が世界中に広がり、WHO はパンデミック宣言をし、日本にも例外ではなく同感染症が拡散しました。同水害で、全国社会福祉協議会や JVORD（全国災害ボランティア支援団体ネットワーク）などから、被災地外のボランティアが被災地に入ることを「自粛しよう」とメッセージが流れました。自然災害と感染症との複合災害となったからです。被災者は自分たちでやるしかないという厳しい現実に追い込まれます。被災者の親戚や知人、友人、会社の同僚などの応援を受けながらも、被災者は毎日毎日猛暑と泥との闘いとなったのです。この影響が後の災害関連死を招いたという事例も発表されています。

この同災害後、私が 2 週間ほどして被災地に入ると、至るところに「物資あります。自由にお持ち帰りください。」という貼り紙が目につきました。ほとんどが被災者の方々自身で立ち上げています。「あれっ、これってどこかで見た風景だなぁ？」と記憶を辿っていると､当 NGO スタッフが､｢それってインドネシアの POSKO と同じじゃない！」と指摘されました。私が実際にインドネシアの西ジャワ地震（2007）で目の当たりにしてきた風景と同じで、いわば「日本版 POSKO」と言えるでしょう。

考えて見ると、こうした感染症との複合災害の場合は、被災地外からの支援は届きにくいのです。他方東日本大震災や阪神・淡路大震災のような大規模災害の場合も、災害直後は SOS が届かず支援が届きません。ということは、被災当時者と近隣で生き残った人たちが、主体となってやらざるを得ないのです｡象徴的なデータとして､阪神･淡路大震災の時には､倒壊家屋の下敷きになっていた被災者は 35,000 人いたのですが、その内 27,000 人もその場に居た人たちが助け出したのです｡当時の兵庫県知事貝原俊民は､その現実を直視し､｢自助、共助に助けられた。官は何もできなかった！」と後日回顧されています。

さて、先日「組織率は上がっているにもかかわらず、実質地域における自主防災組織の活動は退潮している」という報道がありました。益々、災害の多い日本で根本的な減災対策を担うのは、自助・共助の機能を持った「日本版 POSKO」であることが不可欠だと思います。
災害時の POSKO が、その後の復興段階までも機能を果たすような取り組みが平時から求められるということです。一方の「補完性の原理」ですが、これは 1931 年にローマ法王ピオ 11 世が「社会回勅」の中で発せられたメッセージです。原本を直訳した意味は以下のようなものです。

―個々の人間が自らの努力と創意によって成し遂げられることを、彼らから奪い取って共同体に委託することが許されないと同様に、より小さく、より下位の諸共同体が実施、遂行できることを、より大きい、より高次の社会に委譲するのは不正である。―と。

この意味を災害後の支援の方策に換言すれば、「個々の人たちが集まり、POSKO を立ち上げ、創意工夫して被災支援をしようとしている時に、例えば区行政や市行政が「そういうことは我々が行うから、市民がやる必要はないと取り上げてはダメですよ！」ということであり、あくまでも個々の人たちや家族を中心に始めていることを、お互い尊重しましょう！ということなのです。この原理がのちに、「公的部門が担うべき責務は、原則として、最も市民に身近な公共団体が優先的にこれを執行するものとする。国など他の公共団体にその責務を委ねる場合は、当該責務の範囲および性質並びに効率性および経済上の必要性を勘案した上で、これを行わなければならない。」というヨーロッパ地方自治憲章第 4 条第 3 項に謳われ、ドイツを経由して日本に入ってきたのが地方分権です。

この補完性の原理を根底から支えるのは、アルトジウス（1557 ～ 1638）の「生活共同体の自立が前提とされなければならないこと」「生活共同体とは、共生者が相互に助け合うことを約束した結合体であり、魂と肉体の生活を相互に支え合いながら調和して暮らしていくことを意味する」（アルトジウスと補完性の原理―“symbiosis”と”Consociatio”をめぐる政治―　関谷　昇より引用）という思想に基づいているのです。

つまり災害直後の被災者と支援者を構成する「諸共同体」は、お互いが尊重し合い、そして支え合い、上下関係ではなく水平の関係のアソシエ―ションとして調和すると理解できるでしょうか。

従って被災地の最前線といえる POSKO での物資の配布や避難所の運営を通して、被災者が何に困っているのか、また何を求めているのかをアドボカシ―（代弁）することが、NGO・NPO・ボランティアの役割でしょう。地方分権の仕組みにはめ込むと、POSKO が集約している被災者の要望に対して、基礎自治体は全面的にその要望を受けとめる必要があり、それでも解決しなければ中央政府が受けとめ、解決に導かなければならないのが「補完性の原理」なのです。災害というのは、平時の社会のひずみが表に噴出するとも言われます。最大の悪弊は「本人申請主義」であることです。災害時は支援者が代弁することが不可欠になります。でも、NGO は平時においても代弁しなければならないことが多いのです。

阪神・淡路大震災の「ボランティア元年の意義」を作家の柳田邦男さんは、次のように評価されました。

「ボランティア活動が自ら発見し開拓した現代ならではの意味とは､制度化の発達によって硬直化した社会の仕組み（特に行政のしくみ）の「隙間」を行動によって埋めたり縫合したりしつつ、人々と社会に「新しい価値観」の共有を呼びかけ、社会の仕組みの解体・再構築をはかろうとするところにある。その意味での「ボランティア元年」だったのだ。新しい市民社会の構築の哲学が、そこにはある」と。

やはり、災害から被災者を救うには、POSKO が第一歩であると認識する必要があるでしょう。

（被災地 NGO 協働センター顧問　村井雅清）

2021 年佐賀豪雨災害支援活動報告

2021 年 8 月に、佐賀県を大雨が襲いました。この大雨は、2019 年に被災を受けた地域であった武雄市や大町町などに再び大きな被害をもたらしました。2021 年 8 月の災害では、この地域を流れる六角川の排水機能を上回る大雨が降ったため、各所の排水ポンプが停止した影響も大きく、多くの浸水被害をもたらしました。武雄市では、被災エリアも 2019 年とほぼ同一であり、北方町や朝日町で多くの被害が出たほか、令和元年は床下浸水が多かった橘町でも床上浸水の被害が数多く発生しました。

床上浸水をした家の中には、約 2m 浸かったという人もいましたが、多くの方が 50cm ～ 130cm ほどの浸水で、罹災証明の判定は中規模半壊という方ばかりでした。中規模半壊の認定であれば、災害救助法に基づく応急修理制度と被災者生活再建支援金を掛け合わせて約 110 万円ほどの支援金がもらえることになります。しかし、実際にリフォームをしようと思うと、その金額では収まらないことがほとんどでした。

さらに、2019 年の水害で被害を受けた家のリフォームがようやく終わったばかりという人が数多く被災をしました。家のリフォームが終わってまだ 1 年や半年という方が多く、出来るだけお金をかけないようにするため、水に濡れた床板や壁を残そうとされていた方が多くいらっしゃいました。しかし、濡れた床や壁から家の中にカビが広がってしまうなどの被害も拡大してしまったケースもありました。今回の水害は、内水氾濫であったために、被害がわかりづらく異臭がして壁を剥がしてみるとカビだらけという家も少なくありませんでした。2 年前に新築で被災した方は、家のローンに加えてリフォーム費用が上乗せされ、さらに今回の被災を受けたという方もいました。ローンが残っているため引っ越しも容易ではなく、かといって家を売ろうにもなかなか買い手がないため、どちらに進むことも出来ないという人もいらっしゃいます。

当センターでは、武雄市に拠点を構える「一般社団法人おもやい」（以下、おもやい）の活動をサポートしてきました。今回の災害では、二度の被災という事情があるため、出来るだけリフォーム費用の負担を軽減していくことが重要でした。そのため、被災された方だけでなく施工業者の大工さんとも話し合いをしながら、その後の暮らし方を一緒に悩み、描きながら作業を進めてきました。このように、より丁寧な対応をしてくことが求められているのが短期間で複数被災した際の特徴だと感じます。どんな災害時にも、丁寧に一人一人の方と向き合うことは重要ですが、特に今回のように、短期間に二度目の被災を受けた場合は、根気強く一緒に考えることが必要不可欠です。

2021 年の水害もコロナ禍での災害となったため、県外からの支援は限定的となりました。佐賀県では、佐賀災害支援プラットフォームがガイドラインを整備し、県外団体の受入を行いましたが、従来通りというわけには行きませんでした。

このような状況の中では、やはり地域に暮らされている方々による自発的な活動が非常に重要になって来ます。

▲地元のお坊さんたちも作業に参加

武雄市では、地元飲食店の方々による在宅避難者の方への配食支援をおもやいがサポートしました。在宅避難をされている方々は、キッチンも被災して食事が満足に作れないという人たちも少なくありませんでした。

また、家の片付け作業にも地元の方々が多く駆けつけてくれました。地域の方々が参加しやすい環境を作っていくことも非常に重要です。武雄市では、社会福祉協議会の災害ボランティアセンターとは別におもやいがボランティア活動をおこなったため、より多くの支援をおこなうことができました。

現在は、次の災害への不安が大きくなってきています。経済的な理由によって、水害のリスクの高い場所で再建をせざるを得ない方や、災害後の生活再建の中でさまざまな理由によって困難を抱えておられる方もいらっしゃいます。

当センターでは、おもやいと協力し、災害への不安を解消するための防災の取り組みや、生活再建に向けた個別のサポートを継続して行っています。

引き続き、ご支援・ご協力をお願いします。（頼政良太）

＊本事業は、日本財団の助成を活用して実施させていただきました。

Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

▼お弁当の配布

▼壁を剥がすとカビがあり、被害がわかりづらい

ぞう通信。

第 68 号　2022. 07. 20

発行所：被災地 NGO 協働センター　〒 652-0801　神戸市兵庫区中道通 2-1-10
TEL:078-574-0701 FAX:078-574-0702 HP:http://ngo-kyodo.org/

阪神・淡路大震災から 27 年、まけないぞうが生まれて 25 年

阪神・淡路大震災から今年 1 月 17 日で 27 年の歳月が流れました。そして 6 月 3 日で 10000 日が経ちました。あの日の朝、テレビから流れてくる映像は目を疑うような光景でした。そこには街が炎に包まれ、高速道路が折れ曲がり見たことのないような風景が映し出されていました。増えていく犠牲者の数、お昼ごろにはみるみるとその数が増え、心の中で何か居ても立っても居られない感情に襲われたことを鮮明に覚えています。

当時働いていた会社の同僚に大阪出身者がいて、実家の様子を見に行くということで、私もボランティア活動をしたいと一緒に東京を出発しました。それをきっかけに、NGO 活動に参加しました。まさかその時は、東日本大震災のような原発の過酷事故を伴う複合災害や新型コロナウィスルによるパンデミック、そしてロシア軍によるウクライナ侵攻によって「戦争」という悲劇がまた繰り返されるとは想像も尽きませんでした。

そして、震災から 2 年後の 1997 年 7 月にまけないぞうが生まれました。その当時被災者が暮らしていた仮設住宅では、孤独死が相次いでいました。そこでボランティアの人たちは、お茶会、カラオケ、お風呂の送迎、見守りなどたくさんのアプローチを行いました。その一つが「まけないぞう」です。その年の 1 月にロシア船籍のタンカーナホトカ号が座礁し、重油の流失事故が起きました。その時に集まっていたタオルがヒントとなり、タオルを使って何か孤独を紛らわすことができないか考えたのです。西宮で活動していたボランティアグループが関わっていた仮設住宅の住民さんのアイデアでぞうの形をした「まけないぞう」が生まれたのです。それから今年で 25 年が経ちました。これまでの累計出荷数は、約 28 万頭になりました。阪神・淡路大震災から個人・団体問わずたくさんのご支援を頂いてきました。また、海外の災害救援や makenaizone という東日本大震災をきっかけにできたコミュニティの人たちなどのご支援により世界 55 ヶ国・2 地域へも届けられました。

今年 3 月 11 日で東日本大震災から 11 年が過ぎました。今年は新型コロナウィルスのオミクロン株の拡大に伴い、11 年間で初めて被災地に行くことを断念しました。心がざわつく中、被災地では 11 年目の追悼の日を迎えました。1 月 17 日も、3 月 11 日も、他の災害があった日もそうですが、あの日のことを思い出しそれぞれに想いを馳せる大切な時間が訪れます。いのちと向き合う大切な時間・・・。

昨年 12 月、その年の春に訪問して以来 9 ヶ月ぶりに岩手を訪問しました。昨年は新型コロナウィルスが各地で猛威を振るい、緊急事態宣言が解除された束の間の訪問でした。
今回の訪問で約 2 年ぶりにお会いする人もいて、みなさんとの再会を少し緊張していました。新しい家々が立ち並ぶ被災地、人通りはまばらで、つくり手さんのところに足を運ぶと変わらぬ笑顔がそこにありました。久しぶりに顔を合わせたメンバーが、「元気だった？」「体調はどう？」などと互いに声をかけあっていました。この間、家が近所でもこのコロナ禍でほとんど会うことはなかったそうです。

出会いと別れ・・・

2 年ぶりに訪れた大船渡市の小さな漁師町では、悲しい再会もありました。つくり手さんのお一人がお亡くなりになりました。N さんとは仮設住宅で出会い、その後自宅を再建し息子さんと一緒に暮らしていましたが、数年前に病気を患い酸素ボンベをつけた生活をはじめられ、まけないぞうもだんだんと作れなくなりました。私が訪問した時は、顔だけでもとみんなで一緒にお茶っこしながら話している時もあったのですが、それもできなくなくなり、コロナで会えないうちに入院をしてそのまま帰らぬ人となってしまいました。

当時の彼女のまけないぞうへのつぶやき紹介します。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
何度か作るなかで、ますますかわいさが増して愛おしくなってきました。同じように縫うのですが、どこか違ったように見えます。今度はどこの国のかたに行くのかと思い浮かべながらつくりました。たぶんみなさん喜んでくれて、絆を深めると思います。世界は一つです。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

素敵なつぶやきを残して旅立っていきました。きっと天国で見守ってくれていることと思います。そして、世界中に引っ越したぞうさんに会いに行っているかもしれませんね。

そしてもうお一人、つくり手さんの旦那さんがご病気で亡くなりました。旦那さんはこの会えない間、入院され「ぞうさん来ないのか？」と気にかけてくれていたそうです。この地域の“権現様”というお祭りをとても大切にしていて、お祭りのビデオを見せてくれて、「ぜひ見に来たらいいよ！このお祭りはすごいんだよ！」と誇らしげに話してくれたことを懐かしく思い出します。お仏壇の横には生前お作りになった“権現様”の獅子頭が旦那様のことを静かに見守っていました。

亡くなられたお二人には心からご冥福をお祈り申し上げます。

また、もう一人の作り手さんは、少し認知症を患ってきたことを自覚し、自ら元気なうちに「ぞうさんづくりを卒業します」という言葉を頂きました。まだ一人暮らしはできているのですが、その時がきたらいつでも施設に入れるようと準備をしていました。数字に強く、手先も器用で、語り部として県外にも足を運び活躍していました。夏にお邪魔すると戦争についても言及していて、もう 2 度とあのようなことを繰り返してはいけないと話してくれたことが印象に残っています。

彼女の当時のつぶやきをご紹介します。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
『被災しなければ』と辛く、悔しい時、つい精神的に落ち込みがちになりました。そんな時この『まけないぞうさん』をつくりはじめると、自然に何も考えることなく、無心になれる時間を得ることができました。そして、どんな方たちが買って下さるのだろう。どんな子どもさんが抱いてくれるのかなと。大切にしてくださることを願いつつ懸命につくることができました。とてもいい時間を下さったことに感謝申し上げます。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
まけないぞうをとても愛してくれていました。いつまでも元気で長生きしてほしいです。

コミュニティの再生

そして、大槌町では同じ集落の人たちが高台移転をして住んでいます。つくり手さんはもともと同じ仮設住宅に住んでいた仲良し 3 人組で旦那さんはみな漁師でした。現在、この中の 2 人は隣同士に住んでいるにもかかわらず、ここでもコロナ禍になってから全然会えずにいます。ただでさえ、新しい住宅地で津波前のような交流がなくなり、これから近隣住民とのコミュニティづくりが必要な時に人と人との交流が断絶されています。
どの地域でも新しい区画になり、隣近所は知らないもの同士でコミュニティが形成されにくい状況です。まして、高齢になってから新たな交流は難しく、若い人たちのようにすぐにコミュニティができるというわけではありません。
被災地でいま必要なのはコミュニティを育む「密」なのに、コロナという災害で「密」を避けなければならないという、なんとも悩ましい状況にあります。

そんな中で、まけないぞうを通して久しぶりに交流を持つということは、コロナ禍ではとても貴重な時間で、みなさんの笑顔を見るとこちらも元気になります。

大津波から 11 年を迎え、いまだ防潮堤の工事が続き、通い慣れた道を車で進むと、海岸沿いの道が途切れ、山へ誘導され山の一部が切り崩され、真新しい道路につながります。

10 年以上経った今も復興工事は終わっていない所があります。でも 10 年も経つと、周りからは「10 年も経ったんだから、復興したよね？」「まだ活動しているの？」という声を耳にします。これはどこの被災地でも聞く言葉です。復興とは一体なんなのか？？？

そこにきて新型コロナウィルスが被災地に 2 重 3 重と負担を強いています。せっかく再建して、これから町に賑わいを取り戻そうとしている中で、集客が見込めず打撃を受けている商業施設もあります。

そういった中でも、お客さんが絶えない旅館もあります。つくり手さんも働いている釜石市の根浜海岸にある前川民宿です。このコロナ禍でもお客さんをお断りするのが大変だそうです。その民宿の目玉はお膳にのりきらないくらいのお料理を出すこと。従業員が「女将さん、もうこれ以上お膳にはのらないですよ！」というほど、お料理が振舞われるそう。漁師の旦那さんと、料理上手なおかみさんがつくる新鮮な海の幸と郷土料理がお客さんに大人気です。そこで働く作り手さんに「一度宿泊してみて下さい」とお誘いを受けています。なかなかチャンスがなくてまだ実現していないのですが、いつかゆっくりお邪魔したいと思っています。

コロナ禍においても、こうして頑張っている地元の人の姿をみるとこちらも元気が出てきます。

11 年という歳月が過ぎましたが、何年経っても被災者にとっては震災前の「あの日、あの時、あの場所」には戻れません。ある番組で、毎年行われる捜索活動に想いを寄せている人がいました。行方不明になった奥さんを見つけることに一心な男性。もし 11 年目の捜索活動で見つからなかったら、自らいのちを絶とうと思っていたそうです。でも海保の人たちが一生懸命捜索している姿をみて、希望を持つことができ、もう少し生きてみようと思ったそうです。被災者にとっては何年たっても、癒えない心の傷があります。そんな心の傷を抱えながらも、希望を見出しながら精一杯生きているのですね。

まけないぞうのつくり手さんたちも、見た目にはきれいになった自宅で、あるいは街で暮らしていますが、どこかもの悲しさも感じます。以前とは違う生活空間が広がり、同じような場所でもお友達もいないので、「こんなはずじゃなかった」という言葉をつぶやいた人もいます。それでも毎日の暮らしは続いています。まけないぞうがそんな被災者のそばに寄り添っています。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
笑顔でおらねばと思うのですが、知らない土地で好きで来たにせよ寂しいです。南の方から桜の開花がちらほら聞かれて、28 年度も終わる。「まけないぞう」さんも新年度に間に合うように旅立ちたいのよね。そう思うと、縫う手に力が入る。全国の支援者の皆様に買って下さる皆様に感謝を込めて、一枚のタオルを「まけないぞう」さんにして、目の前に並べて行く。1ヶ完成。でも寂しいよ！2ヶ3ヶとそして 50ヶの完成。夢中な心が寂しさを慰め、充実感、幸福感で満たされます。単身の私にとって家族が増えていくみたいな感じがあって、心のケアになっているのだと思います。ありがとうね。お陰様で 2200 個がすぐそこに。それだけ皆様に助けられています。感謝、感謝です。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
2017 年 3 月 27 日　陸前高田市より

25 年経って、11 年経って、支援も少なくなってきていますが、細々でもまけないぞうを必要としている人たちに寄り添っていきたいと思います。

まけないぞうはウクライナ・ロシア支援として、CODE 海外災害援助市民センターの「MOTTAINAI やさい便」を応援しています。まけないぞうの売り上げのうち 100 円を CODE に寄付します。みなさんのご支援をお待ちしています。（増島智子）

＊今回の岩手訪問は株式会社ラッシュジャパンチャリティバンクよりご支援を受けています。
＊まけないぞうが毎日新聞で紹介されました。https://mainichi.jp/articles/20220601/k00/00m/040/314000c

ウクライナとロシアへ　まけないぞうからのお願い

久しぶりに話した作り手さん「戦争まで起きてしまって、私も若かったらすぐにでも支援に駆けつけたいけど、、、」とそんな想いを語ってくれた。戦争を経験したことのある作り手さんは「遠い国のことでも､何が起きているか想像はできます」と。まけないぞうの作り手さんたちもロシア軍のウクライナ侵略で心を痛めています。今、「まけないぞう」が架け橋となり「戦争」で傷ついた人たちの心を癒すことができればと思い、姉妹団体の CODE 海外災害援助市民センターが展開しているウクライナ・ロシア支援を応援することにしました。「まけないぞう」の売り上げ 400 円のうち 100 円は通常通り作り手さんに、もう 100 円を MOTTAINAI やさい便に寄付します。

東日本大震災で被災された人たちは、まけないぞう作りを通して、たくさんの“生きる力”を頂いています。恩返しとして支援の一助になればと思っている人、何もかもを失い生きる気力を失いかけた中で、まけないぞうをつくることで「生きようと」感じてくれた人、復興の最中に家族の病気に打ちひしがれ、まけないぞうを作ることで気持ちが前向きになった人もいます。各地での度重なる災害に心を寄せ『何かしたい』と思った時に、やはりまけないぞうを通してみなさんに笑顔を届けたいと、一針一針、針を運んでいます。現在、新型コロナウィルスが全国的に急拡大し第 7 波に入りました。当センターではガイドラインに基づき PCR 検査をすませて岩手県に入り、まけないぞうの回収を行っています。作り手さんの中には、今回のこの支援活動に対して、作り手さんにお支払いしている手間賃を寄付してくれる方もいます。不穏なニュースに心がざわつく中、まけないぞうが被災地から被災地へ架け橋となっています。

過去の海外の被災地へもまけないぞうが届けられましたが、言葉が通じない、遠く離れた海外の被災地でも「KOBE の地震」は誰でも知っていました。KOBE の被災地からきたまけないぞうをみんな笑顔で受け取ってくれました。
インドでは、このぞうさんを拝んでいたらケガした足が直るかも！トルコでは､あるタクシー会社のタクシー 1 台 1 台にまけないぞうを飾り町中を走ってくれました！

1995 年の阪神・淡路大震災では被災された人たちは、ずっと恩返しがしたかったと思っていた時に、まけないぞうを海外の被災地にプレゼントすることで、「やっと恩返しができる、やっと人のお役に立てるのね」と、笑顔がこぼれたことが忘れられません。
毎日の凄惨な戦禍のニュースを観ながら現地には行けないけど、何かしたいけど何もできない、そんなみなさんの想いをまけないぞうに乗せて、まごころを届けてみませんか？？

▲国東市社会福祉協議会のみなさんも応援してくれています。

頂いたご支援は、CODE 海外災害援助市民センターを通して、日本に避難されているウクライナやロシアの人たちへの支援（MOTTAINAI やさい便）に使われます。

MOTTAINAI やさい便への寄付の目標はまけないぞう 5000 頭販売です。呼びかけをさせてもらって 1 ヶ月、現在までに、これまでのつながりから 1500 頭以上のご支援を頂き残り 3500 頭です！！長期化が避けられない避難民の方へのご協力をぜひよろしくお願いします。

目標 5000 頭
現在 3500 頭

みなさんのご協力をお願いします。

＊「MOTTAINAI やさい便」とは？

CODE 海外災害援助市民センターでは、昨年 6 月より「MOTTAINAI やさい便」と称して、形が悪い、見映えがよくないなどの野菜をコロナ下で困窮している神戸市内の子ども食堂やベトナム人およびミャンマー人留学生や技能実習生の集まる寺院、留学生が暮らすシェアハウス、アフガニスタンからの国外退避されてきた方などへ約 50 回提供してきました。

その新鮮野菜は、丹波（氷上、市島、奥丹波など）、丹波篠山、とびまつ森の会、高木農園、村上ファーム、たつのなどの農家さんから、また CODE の支援者からの寄贈によって、商品にならないけれど新鮮で、美味しい野菜を安価で提供していただき、CODE の賛助会員 Y さん、T さん、正会員 K さんなどの応援で、CODE 未来基金の学生さんたちと共に届けてきました。さらに、今では「ウクライナ侵攻」により神戸に避難してこられた 8 家族 16 人に MOTTAONAI やさいを届けています。（ちなみに神戸市内に避難して来られたウクライナの方は 36 家族 60 人余が暮らしています。）

プーチン大統領率いる露軍によるウクライナ侵攻

2 月 24 日からロシア軍がウクライナへの侵略行為が開始され、3 ヶ月が経ちました。長期化する戦争により、国外避難民は 460 万人以上に登り、国内での避難民は約 650 万人いると推定されています。犠牲者の正確な数字は分かりませんが、ウクライナ、ロシア双方とも多くの犠牲者が出ています。毎日のニュースを見るたびに胸が痛くなります。戦争は絶対してはいけないというこれまでの歴史で学んでいるにも関わらず、人間はなぜ同じ過ちを繰り返すのでしょうか？

当センターが支援活動をしている東日本大震災の被災者であるまけないぞうの作り手さんも戦争を経験した人がいます。岩手県釜石市は軍事工場があって、原爆を落とす標的の候補の一つになったと言われていて、艦砲射撃の被害に遭い、多くの犠牲者を出しています。毎年 8 月 6 日と 9 日には原爆が落とされた時間にサイレンがなり、住民さんが祈りを捧げいます。戦後 70 年の年に訪問したときに、戦争経験者の人たちから当時の話として「あの時は、山からたくさんの砲撃があり命からがら逃げた」を聞きました。また、「戦争に行った人から聞いたけれど、自分の刀が切れるかどうか、敵地の女性の上半身の服を剥ぎ取り、乳房を切っていった」というのです。居合わせた兵士の方が「本当に酷かった。俺たちはそんなことをしに行ったんじゃない。」と聞かされたそうで、「戦後 70 年を迎えた今伝える人も亡くなっていき、私たちが聞いたことを伝えないとね」と話してくれたことがありました。また、なかには当時の話をしていると具合が悪くなり、夜も寝れなくなる作り手さんもいます。戦後 70 年経った今もその心の傷は癒えません。

現在のウクライナでも同じような悲劇が生まれています。戦争は絶対にしてはならないのです。人間の手で始まった戦争は人間の手でとめなければ誰がとめてくれるというのでしょう。（増島智子）

■事務局ボランティアも募集しています！

私たちと一緒に活動してくださるボランティアさんを随時募集しています！初心者の方も全く問題ありません。ボランティアでの活動を通して、NGO や市民社会、防災・減災のことも学ぶことが出来ます。やる気のある方大歓迎です。ぜひお越しください。

当センターの姉妹団体「CODE 海外災害援助市民センター」の活動にもご協力よろしくお願いします。

■編集後記

この通信じゃりみちは、年に 3 回ほど発行をさせていただいているのですが、昨年度は 1 回だけしか皆様のお手元に届けることができませんでした。大変申し訳ありません。

毎年のように災害が続いておりますが、そういったことを言い訳にせず、皆様に情報をお届けできるよう頑張って参りたいと思います。

さて、6 月の後半から、梅雨もそこそこに大変暑い日が多くなっています。熱中症の予防もしっかりとするようにしてくださいね。ひと昔前であれば、夜寝る時にクーラーなんてつけなかったものですが、いまは熱帯夜が続き寝苦しい毎日です。熱中症は、体温もそうですが体の中の水分がなくなることも原因だそうです。夜寝ている間に熱中症にかかってしまっていた、なんていうこともあるそうですから、十分に気をつけてください。

いつも 7 月 8 月は災害が多発しています。空梅雨の年は大雨がまとまって降りやすい傾向もありますので、皆様の地域でも災害に十分お気をつけください。

■入金・カンパのお願い

被災地 NGO 協働センターでは、会員を随時募集しています。普段なかなか活動にご参加できない方でも賛助会員等で活動に間接的にご参加いただくことが出来ます。活動カンパ、事務局カンパも随時受け付けています。下記の振込先によろしくお願い致します。

★団体会員	年会費￥１０，０００	×	１口以上
★個人会員	年会費￥３，０００	×	１口以上
☆団体賛助会員	年会費￥１０，０００	×	１口以上
☆個人賛助会員	年会費￥３，０００	×	１口以上
☆自由選択会員	年会費￥　任意の額		

■郵便振替　加入者名：被災地 NGO 協働センター
口座番号：０１１８０－６－６８５５６

■ゆうちょ銀行
支店番号：一一九（イチイチキュウ）支店／店番：119
当座 0068556 ／受取人名：ヒサイチ NGO キョウドウセンター

■クレジットカードでのご寄付
クレジットカードでも会費やご寄付をしていただくことができます。下記 URL もしくは右の QR コードからお願いします。
https://congrant.com/project/ngokobe/605